

「おせなかったボタン」 2 - (1) 礼儀

あさみは、アニメとパソコンが大好きだ。近頃あさみは、^{ちかごろ}掲示板にこっている。今日も家に帰ると、さっそくパソコンのスイッチを入れた。

「あっ！来てる。来てる。」

昨日、掲示板に書いていたことへの返事が来ていた。思わずにっこりしてしまう。掲示板は、友だちやときには掲示板で知り合った人からも返事が来るのだ。それに、掲示板に書き込んだら、2~3分で返事が来ることもある。それで、ついつい掲示板でメールのやりとりをしていると時間がたってしまう、よくお母さんからおこられる。

ある日のこと、学校に行くと友だちのかなえが、

「たかこさんが、『あさみって^{さいてい}最低。むかつく。』と言っていたよ。」と教えてくれた。

「それ、ほんとうなの。」

あさみは、目の前がまっくらになった。たかことは、^{ようちえん}幼稚園から4年生までずっといっしょだったのだから、まさか、たかこがそんなことを言うわけない。

「なにかのまちがいじゃない。」

と言うと、かなえは、気のどくそうな顔をしながら、

「たかこさんにはっきり聞いてみたら。」

と言ってくれた。

今までも、けんかをしたことはある。でも、2,3日もするとだいたいどちらからともなくあやまって、もとのなかよしにもどるのである。だから、何度も、たかこにわけを聞こうと思うのだが、こわくてとうとう聞くことができなかった。

家に帰ったあさみは、お母さんにも^{そうだん}相談できない。いつものようにパソコンのスイッチを入れ、掲示板を開いた。たかこのことを考えているうちにだんだん、いかりがこみ上げてきた。思わず、

たかこ！うざい！（><）

と文字を打ちこんでいた。

「これをたかこが、見たら……。でも、だれが書いたか分らないし……。」

あさみは、送信ボタンをおそうと思って、もう一度書きこんだ悪口を見たあさみは、はっとした……。今までのたかこの思い出が、次々に目の前にうかんでくる。

「たかこが、この掲示板を見たらきずつくだらうなあ。」

掲示板はたくさんの人が見ているのだ。私だったらたえられない。やっぱり、ちゃんとたかこに聞こう。私にも悪いところがあるかもしれないし、ほんのちょっとしたごいかもしれない。あさみはそう思いなおすと、悪口を消してからパソコンの^{でんげん}電源を落とし、たかこの家にむかった。